

父親のイメージについて(1)

山本勇志、村田 実、吉田修次 (福井県小児療育センター)

大塚富夫 (福井県特殊教育センター)

嶋内政治 (福井県中央児童相談所)

渡辺嵯恵子 (仁愛女子短期大学)

吾々は、母子相互作用研究の一環として、未熟児室の保育児を対象として、出産直後の母子の接触がその後の育児態度に及ぼす影響について検討してきた¹⁾。その中で母の育児態度を評価するための基準の検討を行った^{2) 3) 4)}。

この研究中に吾々が関心をもったのは、この母と子を支える父の役割と影響である。特に障害をもった子を支える家庭に於ける父の役割は大きな意味を持つと考えられる。更に、最近、登校拒否を頂点とする小児の情緒障害に於ける「父」の役割が重視される等の立場から「父親」について検討してみたいと考えるに至った。

父親がいかなるものとして期待されているか、父親はいかなるものとして自分を認めているか、フロイド⁵⁾はエディプスコンプレックスを基盤として、同一視の対象としての父親を考えた。パーソンズ⁶⁾は、家庭に於ける社会の代表者、社会における家族の代表者としての父親という論題を検討して、家族を社会に関係づけるための父親の機能を「道具的な機能」と表現している。

更にカーニップ⁷⁾は父親に子を、作る、養う、保護する、教育する、手本になる、という機能をあげ、更に新しいものとして、遊び友だちとしての機能を付加している。

また、依田明⁸⁾らは社会のエージェントとしての父親の役割の必要性について論じている。

父親が子どもに接する態度が、子どもの成長発達に影響を及ぼすとすれば、吾々は、その父親の育児態度の評価をできるだけ鮮明にするための指標を必要とする。サイモンズが母親の育児態度を解析するため、教育軸(Y)と愛情軸

(X)をとり、Y(+)支配、Y(-)服従、X(+)受け入れ、X(-)拒否という座標軸の上に、母の育児態度を展開した如く、適切なIndicationを見出すことができるなら、それは父親の育児態度を評価し、子の成長発達への影響を比較するのに有効であろうと考えられる。

1985年発行の青少年白書⁹⁾の中でも、理想の父親像を厳父型か、友人型か、仕事重視型か家庭生活重視型か、服従型(自分の考えに従わせる)か、尊重型(子どものしたいとおりにさせる)かなどを日本、韓国、アメリカ、フランス、スイス、スウェーデンで調査を行っている。が、この分類の軸になるものは何かという点になると不明確である。

吾々はまず、福井の父親が、父親の役割に対してどのようなimageをもち、自分をどのような存在として認めているかということを知りたいと考えた。そのため、

1. あなたはこれまでに、自分を父親だと感じたり、父親としての役割を求められていると感じた場面がありますか。

2. 日頃、父親として努力していること。

3. 自分の父親を、父親だと感じたのはどういふ場面か、どのように自分の父親を評価しているか。

4. 自分の子どもに、どのような父親になっ てほしいと思うか。

等について、自由に記述してもらうことから、研究をスタートした。

この方法は、○×とちがって、解答者の理解と協力がなければ、資料すら集まりにくい。幸

い、県教育委員会、学校等の協力を得て、1500の解答を得ることができた。

この自由記述による解答を、いろいろな角度からながめ、整理することにより、父親の機能に基づく育児態度を分類し評価する基盤を発見していきたいというのが、吾々の第一の目標である。

研究方法

1. 期日

昭和59年12月～昭和60年2月

2. 対象

福井市内 敦賀市内 大野市内
 令庄町内 坂井郡内

高校生を持つ父親

中学生を持つ父親

小学生を持つ父親

幼稚園児を持つ父親

保育園児を持つ父親

調査方法

A. 対象者及び家族の実態

表1 調査対象

	N	%
1. 幼児を持つ父親	337	22.1
2. 小学生	389	25.5
3. 中学生	645	42.3
4. 高校生	154	10.1

父親の年齢は表2に示すようで、40歳代が最も多く、56.4パーセント、次いで30歳代が35.8パーセントであった。

表2 父親の年齢

	N	%
1. 20 歳 代	9	0.6
2. 30 歳 代	535	35.8
3. 40 歳 代	843	56.4
4. 50 歳 代	96	6.4
5. 60 歳 代	6	0.4
9. 無 記 入	6	0.4

父親の職業は会社員が53.4パーセントと最も多く、次いで自営業が20.1パーセントであった。あとの職種については表3に示すようになった。

表3 父親の職業

	N	%
1. 農 村 漁 業	34	2.3
2. 自 営 業	300	20.1
3. 会 社 員	799	53.4
4. 公 務 員	210	14.0
5. 教 職 員	22	1.5
6. サ ー ビ ス 業	77	5.2
9. 無 記 入	53	3.5

子どもの第一子の年齢は中学生で32.6パーセント、高校生20.0パーセント、小学校高学年17.3パーセントで他については、表4に示すようであった。

表4 第一子の学年区分

	N	%
1. 保育園・幼稚園	101	6.8
2. 小学校低学年	136	9.1
3. 小学校高学年	258	17.3
4. 中学校	487	32.6
5. 高等学校	299	20.0
6. 大学有職	159	10.6
9. 無 記 入	55	3.7

子どもの数は、2人兄弟姉妹は53.9パーセントであり、3人兄弟姉妹は35.4パーセントであった。

表5 子ども数

	N	%
1. 1 人 児	80	5.4
2. 2 人 兄 弟	806	53.9
3. 3 人 兄 弟	529	35.4
4. 4 人 兄 弟	59	3.9
5. 5 人 兄 弟	8	0.5
6. そ れ 以 上	2	0.1
9. 無 記 入	11	0.7

他の兄弟姉妹については表5に示すようになった。

祖父母同居の状態と、母の仕事については、

表6に示すようであり、祖父母同居なしで母働くが39.6パーセントで最も多く、次いで祖父母同居で母働くが22.5パーセントであった。福井県は働く女性が多い県であると言われるが、ここでもそのことがはっきり出ており、60パーセント以上の母親が働いていることがわかる。

表6 祖父母同居と母の仕事

	N	%
1. 同居 母働く	336	22.5
2. 同居 母無職	153	10.2
3. 同居なし 母働く	593	39.6
4. 同居なし 母無職	265	17.7
5. 同居 母無記入	23	1.5
6. 同居なし 母無記入	6	0.4
9. 無 記 入	119	8.0

B. 質問に対する調査結果

1. 父親だと感じた場面について

自由記述の複雑多岐にわたる内容を整理するために、スタッフが何回か集まりアンケートを読み合わせるにより、表7に示した項目に便宜上まとめた。この表でみると、誕生や成長という、感覚的な場面が最も多く、22.7パーセントで、次いで病気・事故という保護的な場面が10.8パーセントであった。これで見限り、しつけ、相談、アドバイス等の教育的、指導的な場面で自分を父親だと感じていることが少なかった。

表7 父親だと感じた場面

	N	%
1. 誕生や成長・感覚的に	339	22.7
2. 病 気 ・ 事 故	161	10.8
3. 行 事 ・ 地 域 社 会	98	6.5
4. 家 族 の 楽 し い 語 ら い	131	8.8
5. し つ け	95	6.3
6. 相 談 ・ ア ド バ イ ス	132	8.8
7. 反 社 会 的	70	4.7
8. そ の 他	37	2.5
9. 無 記 入	432	28.9

自分を父親だと感じた時の年齢については、26～30歳が最も多く、19.2パーセントで、31～

35歳が19.0パーセントで、36～40歳が12.5パーセントであり、年齢の若い時に父親だと感じている。このことは、自分を父親だと感じたことが子どもの誕生の時ということが多かったことでも言える。

そこで、表9では年代別に、自分を父親だと感じたことについて調べてみた。これで見ると、若い年代ほど、感覚的なことに、自分を父親だと感じているが、50歳代で、相談、アドバイスが20.8パーセントと最も多く出てきている。

表8 父親だと感じた時の年齢

	N	%
1. 20 ～ 25	61	4.1
2. 26 ～ 30	287	19.2
3. 31 ～ 35	284	19
4. 36 ～ 40	187	12.5
5. 41 ～ 45	126	8.4
6. 46 ～ 50	38	2.5
7. 51 ～	6	0.4
9. 無 記 入	506	33.8

2. 父親として努力していること

次に父親として、子どもに接する時どのようなことに努力しているかを整理してみた。

日本でも、西欧諸国でも、長い間存在している、最近急に損失しているとみられる父親の「権威」の有無のひとつをIndicationとして分類してみた。

権威を維持するということは一面孤独に耐えるという要素を持っていると思われる。従って、その対極には協調とだんらんをおいて表9に示す項目にわけてみた。

その結果は権威を維持する3.7パーセント、生計を支える5.4パーセントといった孤高に耐えることに努力している父親の姿は少なかった。それよりもだんらんが24.1パーセントと最も多く孤高に耐えることよりも、家族と協調し楽しい家庭生活を送ることに努力している姿がみられる。社会の組織が変わると共に、権威を保ち孤高に耐えるという明治の父親のイメージは崩壊して、現在の父親は遊び仲間としての父親の

イメージが出来上がりつつある。また、「養うもの」より、「遊び仲間」としての努力がみられる。

今後の検討の方向

自由記載されたものを、どのように読みとっていくか、適切なindicationに従って分類してゆけばそれは、父親のimageを確実にすることにつながるのではないかと考えて、いろいろと検討した。その結果吾々は、

1. 社会的・支配的・機能的
2. 社会的・支配的・感性的
3. 社会的・服従的・機能的
4. 社会的・服従的・感性的
5. 家庭的・支配的・機能的
6. 家庭的・支配的・感性的

7. 家庭的・服従的・機能的

8. 家庭的・服従的・感性的

等のファクターを基盤として分類してみることにした。

すべての内容が、この分類の項目の中に入ってくるかということ、一例、一例についてスタッフ全員で読み合わせをしながら、統一した判断で現在まとめつつある。このことがまとまった段階でこれらのことをコンピューターに入れ、ファクターとの間の相関を追求しようとしている。

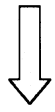
今後の課題として、父親の求められる特性が、はっきりしてきたら、今度はそれを追求する質問を作り、福井県の父親のイメージを求めべく、次の目標に向かう予定である。

表9 父親だと感じたのはどういうことか年代別に見ると

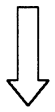
父親だと感じた	20歳代		30歳代		40歳代		50歳代		60歳代	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1. 誕生や成長感覚的	0		125	23.4	211	25.0	18	18.7	1	16.7
2. 病 気・事 故	1	11.1	57	10.7	80	9.5	7	7.3	1	16.7
3. 行 事・地域社会	0		44	8.2	53	6.3	6	6.4	0	
4. 家族の楽しい語り	2	22.2	79	14.8	68	8.1	5	5.2	0	
5. し つ け	3	33.3	41	7.7	56	6.6	10	10.4	1	16.7
6. 相談・アドバイス	0		14	2.6	99	11.7	20	20.8	0	
7. 反 社 会 的	0		10	1.9	23	2.7	1	1.0	1	16.7
8. そ の 他	0		14	2.6	21	2.5	2	2.1	2	33.2
9. 無 記 入	3	33.4	151	28.2	232	27.6	27	28.1	0	

表10 父親として、努力していること

	(1)		(2)		(3)	
	N	%	N	%	N	%
1. 権威を維持する	57	3.7	52	3.6	26	1.8
2. 生計を支える	82	5.4	31	2.2	18	1.3
3. 子どもの学本 (生きざま)	218	14.3	152	10.0	71	4.7
4. 学習指導 (生き方の指導)	39	2.5	24	1.7	17	1.2
5. し つ け (社会適応)	183	12.0	197	12.9	127	8.3
6. 健康管理	56	3.7	26	1.8	26	1.8
7. 相 談	48	3.1	52	3.6	27	1.9
8. だんらん	368	24.1	267	17.5	153	10.0
9. 無 記 入	442	29.0	695	48.7	1041	73.0
a. そ の 他	33	2.2	30	2.1	20	1.4



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



吾々は、母子相互作用研究の一環として、未熟児室の保育児を対象として、出産直後の母子の接触がその後の育児態度に及ぼす影響について検討してきた 1。その中で母の育児態度を評価するための基準の検討を行った 2)3)4)。